

□ 「ものがたり」の授業



具体的な「ものがたり」の授業とは

前項で、「ものがたり」の授業とは、『ものがたり』の持つ力を生かすように学習活動を組織した授業』であると述べました。そしてその「ものがたり」の持つ力とは、次のようなものでした。

- (1) 実感を伴う、深い理解が得られる
- (2) 主人公（主体）になれる
- (3) 語ることで、新たな意味や価値を実感できる

具体的にはどのようにして授業にこの力を生かすのでしょうか。

イメージとしては、「本校研究の概要」で述べたように、以下のよ

うな授業を想定しています。

自ら課題に向き合い、解決方法を考え、調べ、試し、失敗する。悩んで他者の意見を聞き、教師に相談し、さらに自らの学びを振り返る。それでも分からず悶々とした時間を過ごす。そんな過程の中で、自分なりの筋道だった考えや理解に到達したとき、「なるほどそうだったのか」「やっと分かった」という腹の底からの実感が得られる。

では、どのようにすれば各教科でこのような授業になるのか。

以下の3つがポイントであると考えています。

- (1) 新たな「ものがたり」が生まれる単元構成と問い
- (2) クリティカルに「聴く」「問う」ができる生徒の育成
- (3) 語り直しができる生徒を育てる教師の関わり

以下、国語の「走れメロス」を例に説明します。

(1) 新たな「ものがたり」が生まれる単元構成と問い

「走れメロス」の授業で、「この小説の主題は『真実』です。その理由は…」などと解説をしたのでは、授業の意味がありません。生徒自らが作品に関わり、自分の力で主題に迫ることが、国語の力を身につけるために必要です。そのため、以下のような単元構成を考

えました。

【「走れメロス」の単元構成例】

時間	学習内容と学習課題（中心の問い）
1	・ 全文を音読する ・ 設定（時・場・人）、構造（Ⅰ起承転結）を読み取る 主役、対役、No3はだれか
2	・ 人物像を読み取る
3	①王は悪人か②メロスは善人か ③王とメロスの対比
4	・ 構造（Ⅱクライマックス）を読み取る クライマックス（メロスの考えの変わる所）はどこか
5	・ 主題に迫るⅠ クライマックスまでメロスは何のために走っているか クライマックス以後メロスは何のために走っているか 王はなぜ考えを変えたか
6	・ 主題に迫るⅡ セリヌンティウスがメロスを疑ったのはいつか
7	・ 主題に迫るⅢ 主題（作者が伝えたいこと）は何か ・ 学習記録文を書く（残りは家庭学習）

それぞれの学習課題は一貫して、生徒自身が本文中の表現を根拠に判断していくものとなっています。そして、この単元構成の中で、最も重要なのは6の「セリヌンティウスがメロスを疑ったのはいつか」という問いです。

5までの活動で、メロスの走る理由が、「王に勝つため（自分のため）」から、「信頼に報いるため（セリヌンティウスのため）」に変化

していること、また、極度の人間不信であった王が考えを変えたのは、メロスが間に合ったからだけではなく、メロス、セリヌンティウス共に人としての弱さを抱えながら、それに打ち勝ったことを押さえています。このまま7の「主題は何か」に入っても学習は成立します。しかし、あえてここに6の問いを加えることで、より深い理解に導こうとしています。

【新たな「ものがたり」が生まれる問いの条件】



新たな「ものがたり」が生まれるためには、**全員がいずれかの立場に立てる問い**が必要です。「セリヌンティウスがメロスを疑ったのはいつか」という問いに対しては、とにかく何らかの答えを持つこ

とができます。生徒は「一度だけ、ちらと君を疑った」という表現からスタートして、根拠となる他の様々な表現を探し、いつであるかを特定します。そして教師は、いくつかに分散する答えを、「刑場に引き出される前か、後か」の2つに整理します。

このいずれの立場を取るかによって、生徒の解釈は、セリヌンティウスが「メロスを信じること」だけを大切にしているのか、「自分の命」も大切にしているのかに分かれることが、明らかになっていきます。また、セリヌンティウスの対となるメロスの走る理由も「信頼されているから」走るのか、「セリヌンティウスの命を助けるため」に走るのかに分かれます。

「命」と「真実」「信頼」という言葉の持つ、より深い意味に触れることになるのです。「間に合う間に合わぬは問題ではないのだ、人の命も問題ではないのだ」という表現を読み切れていない生徒は多くいます。この表現は「セリヌンティウスの命がどうなってもいい」のではなく、たとえ間に合わなくてセリヌンティウスが死んだとしても、信じられていた以上「走るより他はない」とメロスが覚悟したことを意味します。同じように、セリヌンティウスは、たとえメロスが間に合わなくても、信じ切って死んでいく、という覚悟をしたということです。だから「刑場に引き出されても、平気でいました。王様がさんざんあの方をからかっても、メロスは来ます、とだ

け答え、強い信念を持ち続けている様子でございました」という表現の意味が新たに浮き上がってくるのです。この段階ですでにセリヌティウスは、「(メロスが) 間に合う間に合わぬは問題ではないのだ、人の(自分の) 命も問題ではないのだ」という境地に至っていると考えられるのです。二人の真実^{マコト}は生死を超えているのです。

もちろん、このように解釈することが絶対ではありません。いつ疑ったとはあらわに書かれていないのですから。当然、上記の解釈を説明して一方の立場に立たせる必要もありません。ただ、「セリヌティウスがメロスを疑ったのはいつか」という問いによって、生徒が本文の表現を手がかりに「真実」のより深い意味に到達できる可能性があるということです。以下に生徒の学習記録文を示します。

色々	イコ	いの	日	刑	だ。	走	悪	も	合	信	を	は	に	強	ら	で	ス
々な	コ	の	を	場		った	い	強	わ	念	を	刑	に	い	が	の	
こと	よう	では	過	に		た	薄	い	な	は	疑	場	言	信	ッ	こ	
が	も	ない	ぎ	引		後	を	信	く	メ	気	に	っ	念	て	と	
頭	し	か	レ	き		又	見	念	て	ロ	配	引	い	を	も	刑	
と	な	と	い	さ		メ	た	を	も	ス	が	き	ら	全	場	場	
め	い	か	る	さ		リ	後	持	一	は	く	あ	い	く	に	に	
ぐ	の	と	か	か		ヌ	セ	い	度	必	な	た	ら	分	引	引	
っ	で	か	ら	る		の	リ	る	疑	ず	こ	こ	は	分	き	き	
て	は	ま	人	前		た	ヌ	の	っ	と	事	う	は	分	出	出	
も	な	さ	口	は		後	ニ	た	た	た	二	に	も	分	す	す	
お	い	か	ス	ず		だ	テ	め	後	元	事	セ	ろ	分	も	も	
か	か	メ	間	と		か	イ	た	だ	間	分	リ	リ	分	も	も	
れ	な	ロ	に	一		り	ウ	と	か	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
く	ど	ス	合	人		一	ス	い	り	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
な	と	は	わ	で		度	の	か	り	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
い		帰	な	い		疑	た	メ	ニ	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
		ッ	な	か		っ	後	ロ	テ	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	二		た	だ	ス	二	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	人		か	り	が	テ	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	で		り	ニ	は	二	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	一		一	テ	メ	テ	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	人		度	イ	ロ	二	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	で		疑	ウ	ス	テ	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	一		っ	ス	が	二	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	人		た	の	は	テ	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	で		か	た	メ	二	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	一		り	後	ロ	テ	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	人		一	セ	ス	二	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	で		度	リ	が	テ	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	一		疑	ヌ	は	二	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	人		っ	の	必	テ	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	で		た	た	ず	二	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	一		か	後	と	テ	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	人		り	だ	い	二	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	で		一	り	か	テ	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	一		度	ニ	メ	二	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	人		疑	テ	ロ	テ	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	で		っ	イ	ス	二	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	一		た	ウ	が	テ	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	人		か	ス	は	二	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	で		り	の	必	テ	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	一		一	た	ず	二	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	人		度	後	と	テ	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	で		疑	だ	い	二	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	一		っ	か	り	テ	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	人		た	り	ニ	二	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	で		か	一	テ	テ	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	一		り	度	二	二	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	人		一	ス	が	テ	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	で		度	の	は	二	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	一		疑	た	必	テ	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	人		っ	後	ず	二	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	で		た	セ	と	テ	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	一		か	リ	い	二	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	人		り	ヌ	か	テ	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	で		一	の	り	二	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	一		度	た	メ	テ	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	人		疑	か	ロ	二	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	で		っ	り	ス	テ	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	一		た	一	が	二	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	人		か	度	は	テ	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	で		り	疑	必	二	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	一		一	っ	ず	テ	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	人		度	た	と	二	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	で		疑	か	い	テ	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	一		っ	り	か	二	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	人		た	ニ	メ	テ	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	で		か	テ	ロ	二	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	一		り	の	ス	テ	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	人		一	た	が	二	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	で		度	後	は	テ	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	一		疑	だ	必	二	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	人		っ	か	ず	テ	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	で		た	り	と	二	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	一		か	ニ	い	テ	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	人		り	テ	か	二	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	で		一	ウ	り	テ	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	一		度	ス	り	二	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	人		疑	の	り	テ	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	で		っ	た	メ	二	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	一		た	後	ロ	テ	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	人		か	だ	ス	二	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	で		り	か	が	テ	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	一		一	り	は	二	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	人		度	ニ	必	テ	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	で		疑	テ	ず	二	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	一		っ	イ	と	テ	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	人		た	ウ	い	二	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	で		か	ス	か	テ	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	一		り	の	り	二	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	人		一	た	メ	テ	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	で		度	後	ロ	二	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	一		疑	だ	ス	テ	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	人		っ	か	が	二	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	で		た	り	は	テ	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	一		か	ニ	必	二	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	人		り	テ	ず	テ	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	で		一	ウ	と	二	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	一		度	ス	い	テ	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	人		疑	の	か	二	に	事	ウ	ウ	分	も	も	
			い	で		っ	た	り	テ								

ぼうう。レカレ、刑場に引き出された後であ
 れば、王にカウカワれるのをアイロストラト
 スが見た後である。刑場に引き出されても平
 気でいて、メロスは来る、と強い信念を持
 っていた後に、疑ったりするだろうが。つり
 合げられると死を感じるから、疑うという意
 見があつたが、つり合げられていく途中にメ
 ロスは帰ってきている。ここでの疑うとは
 危険を感じたからではなくて、メロスが約束
 を守つてくれまいのどほほいかという不安か
 うのものだ。死を感じたから疑ったけど、帰
 ってきたからやっぱり信じられる、という楽
 々なものではなはずだ。疑ったからこそ、
 来ないことも覚悟で、信じて待つ、といふと
 いう気持ちができるはずだ。そんな気持ちで
 待つ、ているのがアイロストラトスが見た場面
 だ。刑場に引き出された後であらば、信じて
 待つという場面が入らない。それでメロス
 とセリヌンティウスの友情はデ、オニスに負
 けてしまふ。一度疑つてから強い信念を持

コクノ 2-70 40x20

授業が全て終了した後、振り返って書いている文章です。「いつ疑
 ったか」という問いから、メロスとセリヌンティウスの間の「真実」
 について、「たとえ間に合わなくても、死は怖くない」「疑ったから
 こそ、来ないことも覚悟で」など、新たな「ものがたり」が生まれ
 ています。また、そのことが「王はなぜ考えを変えたか」という問
 いの解釈にも影響を及ぼしているのが分かります。

上記のように、単元構成と問いこそが「ものがたり」の授業を成
 立させる鍵となります。

(2) クリティカルに「聴く」「問う」ができる生徒の育成

本校では「クリティカルに」を「相手の言うことを鵜呑みにせず、

吟味して」というニュアンスでとらえています。「聴く」「問う」力は、一朝一夕には身に付きません。多くの手立てを用いて、継続して育てています。実際の生徒にどの程度「聴く」「問う」力が身に付いているのかは、研究発表会でご覧ください。

(3) 語り直しができる生徒を育てる教師の関わり

教材や他者との対話が充実していたなら、自己の「ものがたり」はいったん解体されています。様々な情報や考えを自己の中に取り入れるからです。そしてもう一度それを語り直すことで、新たな意味や価値に気づき、「ものがたり」はより発展して再構築されます。その方法は多々ありますが、その一例を以下に示します。既出の生徒が、授業後に振り返って書いた文章の終末部分です。

名前が書いてある人物は重要人物と聞いた時	ロストラトスはおまけのよう存在だった	んて考えもしないところだった。ましてフ	セリヌニテイウスがいつメロスを離したか	く考え、知ることにするとおぼえられた。	人のことも、デハオニスのこともこんなに深	ぐらいしお思いつかないだろう。まさかメロ	姿に感動した、とカオジい、とかそんなこと	れが書けないうだろう。メロスが一生懸命走る	け、なんといわれたり、おまけらしくに描ぐら	走れメロスと授業で世帯に感動文を書	又の魁力なのだろう。	その人といたい、と思うだろう。それがメロ	た心で接してくる人がいた。だから、	メロスに頭は考えている。みんな心があるメロ	と思う。どんな場合にも、知らず知らずの	打算を離れた心、というのとはとも離れ	いし、命だ、と投げ出す覚悟がある。一利書	スのため。自分のことなんてほとんど頭にな
----------------------	--------------------	---------------------	---------------------	---------------------	----------------------	----------------------	----------------------	-----------------------	-----------------------	-------------------	------------	----------------------	-------------------	-----------------------	---------------------	--------------------	----------------------	----------------------

は、どこが重要なんだろう、とも思った。でも
 ち、今日はそれ以外の人物について、とても深く
 理解できたと思う。授業で一人で見えること
 で、少し考えが深まり、友達と交流するのと
 どもう少し考えが深まり、全議の形がどうな
 のたぐいさんの意見を聞くことでもう少し考えが
 深まり、それについて議論文を書いたこと
 とで、レポート作りとまとめられる。深めて授業
 通りではなく、自分の頭で考えたことをどん
 どん広げていけるので、最後はじっくりと、
 こういうのを書くのは、なんとなく好きにな
 った。いろいろある、と思った。
 「走れメロス」という題は、メロスが走っ
 ていけるから、というのではなく、信頼してく
 れているせり、というのだから、走るんだ
 ！という気持ちが込められているのだと思う。
 本文中に、「走れ！メロス」という部分があ
 る。そこは、メロスが悪い夢から覚めて、走
 り出す場面である。メロスはその前から走っ
 ていた。でもおえて、その後からが、作者に

して、その伝えたい「走れメロス」なのだと思
 う。私にとっでは、その「走れ！メロス」と
 いう文章が印象的でなう。
 「走れメロス」は、文章の中の言葉から
 登場人物の性格や気持ちがいろいろ読みとれ
 る。そういう活動がいろいろあると、生かす
 ことができたらいいなあ、と思う。

「走れメロス」自体に対する振り返りであると同時に、学習を進めてきた自分を振り返り、そこに意味や価値を見いだしているのだと考えます。また、「ものがたり」によって自己形成を行っている一例であるともいえます。